『英語教育研究』No.39 (1996)

リスニングの指導———逐次通訳教授法

広島大学総合科学部　山　田　　純

ことばの教授・学習方法は2通りしかない(スタインバーグ，1995)。第1は，解説による方法である。学習者にことばを提示し，要点を第3者(教師)が解説する。この場合，言語学や心理言語学や教育学などの高度な知識を有するか否か，そして，その内容をかみくだいて学習者にわかりやすく伝えられるか否かで，教師の力量が測られる。わかりやすく，効果的に伝えるという技術は，だいたい場を踏むことによって培われるので，ベテラン教師がこの点で優れている。その解説力は，文法訳読式教授法においてもっとも活かされてきた。そこから，今日の優れた読解法の教材(リーダー)が産まれたと言ってよい。しかし，リスニングの指導では，教師の解説力を発揮する場がなかった。今のところ優れた聴解法の教材は多くない。

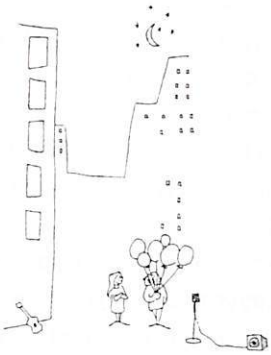
第2の方法は，ある条件下でことばを提示し，学習者が独自に学ぶ。母親は最良の言語教師であると言われる。その理由のひとつは，母親が子どもがどのようなことばを知っていて，どのようなことばを知らないか，どのように話しかけたら理解でき，どうすれば通じないか，をよく知っていて，その範囲でコミュニケーションをしようとするからである。ところが，英語教育のリスニングの指導では，教師はあたかも闇夜に向かうがごとく，教材を学習者に与えてきた。何が理解でき，できないか，それが理解できないまま，授業が終わる。これは，学習者も同じであった。

文法訳読式教授法では，コミュニケーションのニーズの高さはさて置き，母語で，教師または学習者が反応する。だから，理解の状態が教師と学習者に具体的にわかる。そのときの教材が失敗であれ，成功であれ，つぎからの教材への対処の目安がつく。そこから，母親のことばのように，学習者の学習しやすいことばへ進む。それによって，文法訳読式教授法の中で洗練された教材ができ上がった。そのようなプロセスがリスニングの指導の中ではまだ始まっていない。

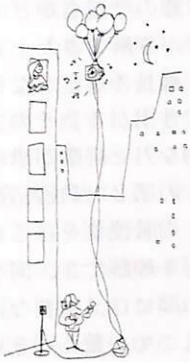
特定の条件下での教材の提示が極端な効果をもたらす。それを多くの教師が気づいていないことが，悲喜劇である。つぎのミニ実験を考えてみよう。まず，条件1では，1の絵，条件2では，2の絵，条件3では，絵なしで，つぎの録音テープを聞くとする。そして，そのあとでテープの内容がどのくらい理解できたかを調べる。

If the baloons popped, the sound wouldn't be able to carry since everything would be too far away from the correct floor. A closed window would also prevent the sound from carrying, since most buildings tend to be well insulated. Since the whole operation depends on a steady flow of electricity, a break in the middle of the wire would also cause problems. Of course, the fellow could shout, but the human voice is not loud enough to carry that far. An additional problem is that a string could break on the instrument. Then there could be no accompaniment to the message. It is clear that the best situation would involve less distance. Then there would be fewer potential problems. With face to face contanct, the least number of things could go wrong. (Taken from Bransford and Johnson, 1972)

明かなように，絵なし条件では，上記の談話の意味はまったく理解できない。実は，条件1では，図1の1の絵を，条件2では，2の絵を与えた。



条件1



条件2

図1　談話理解と条件

また，条件1でも理解不能であろう。条件2でのみ，理解可能である。なぜ条件2以外では，理解不能なのか。"the baloons" は，条件3では，どんな "baloons" かわからない。「気球」かも知れないし，「アドバルーン (advertising balloons)」かも知れない。条件1では，絵にある "baloons" であることはわかる。しかし，つぎの "the sound" は条件1でもまったくわからない。まして，なぜ "not carry" なのかがわかるはずはない。表1では，3条件の理解度を比較しているが，条件1と3で，ほとんどすべての句が理解不能であることがわかる。表1について，テキストの残りの部分の比較を試みられたい。

表１　３条件における談話理解度の比較

表　　現	条件１	条件２	条件３
the balloons	＋	＋	－
popped	＋	＋	－
the sound	－	＋	－
not be able to carry	－	＋	－
everything	－	＋	－
too far away	－	＋	－
the correct floor	－	＋	－

もちろん，このような事例は，非現実的である。しかし，学習者がもつ能力と提示される言語材料との間にはこのくらい大きなギャップが生じ得ると考えなければならない。英語ができる学習者は，条件２のような状態にあり，できないと思われている学習者は，条件１や３の状態にある。教師が，上に述べた第２の方法で教育できるためには，どの状態の学習者がどの項目をなぜ聞いて理解できないかがわからなければならない。それが理解できた上で，はじめて特定の学習者群にふさわしい教材が選定できる。一旦，最良の選定がなされれば，リスニング指導の場合，教室において教師の活躍の場ができ上がる。そのようなお膳立てができるためには，第１の方法以上に教師側に学術的な力と経験が求められる。第１の教授法は，華々しく，誰の眼にもすぐわかるが，この第２の教授法は，目立たない。しかし，それは，玄人の仕事であり，成果は，第１の教授法をはるかに凌ぐ。

学習者が何を理解でき，何を理解できないかについて，リスニング指導と文法訳読式教授法との間には，重要な違いがあり，発想を抜本的に変えなければならないところがある。ここで，驚くべき現象を報告する。これは，平成４年度総合科学部卒業の榊敏江さんの研究である。

広大生の中で，CELT のリスニングテストの上位群10名と下位群10名を被験者として，オーディオ・タキストスコープで，bicycle や batter などの高頻度語と baker や channel などの低頻度語を聴覚提示したところ，認知反応時間は，図２のようになった。

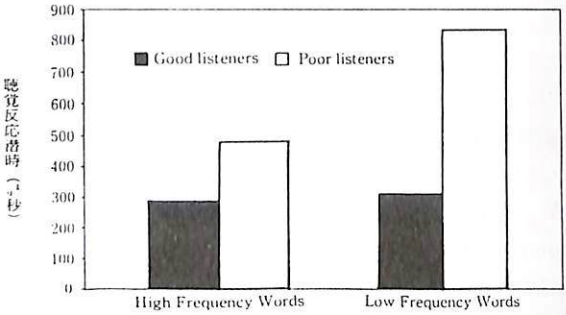


図２　英単語の聴覚反応潜時

低頻度語といっても，実際は，しばしば使用される語ばかりである。そのような語を認知するのに1.2秒以上（830ミリ秒に語自体の継続時間の約400ミリ秒を加算）もかかっていたのでは，通常の発話を理解するのは不可能である。通常の発話は，分速150語くらい，場合によってはその倍くらいの速さになり，上位群も，図2に示す速度では，通常の会話についてゆけない。リスニングの場合，訳読と異なり，瞬時に過ぎゆく時間との闘いがある。英語の母語話者は，このような実験をすると，提示された語が言い終わらないうちに，その語を認知する。したがって，図2では，マイナスの値が出る。

教師は，具体的にどのような語を含む句がどのくらい遅れるか，なぜか，といったことを把握しなければならない。もちろん，知覚的な困難などもある。それやそのほかの面も考慮し，学習者を理解しなければならない。それが最適なリスニング教材を準備する長いプロセスの中で必要不可欠であるが，これまでそのような明示的で実質的な試みがなされたことはない。

さて，そのような研究も教育も一緒に累積的に行おうとするのが，ここに発表する「逐次通訳法」である。これは，文法訳読式教授法のスピーチ版である。教師は，テープレコーダーを2台用意する。1台は，教材提示用であり，もう1台は反応記録用である。ワイヤレス・マイクを2本くらい用意し，学習者側に渡す。指名された学習者は，通訳者のように，句ごとに日本語に訳してゆく。これまでのリスニングの指導では，ベテラン教師の解説力を発揮する場がなかった。逐次通訳法では，その解説力は，ほぼそのまま使える。また，学習者のほうも，学習したという実感を強くもつ。少し慣れてくると，通訳者よろしく堂々と訳してゆき，ごまかしかたも巧みになる。ナイーブな学習者は，どこが聞き取れ，どこが聞き取れないか，なぜなのかを，教師の解説をも参考にしながら学習してゆく。解説がない場合でも，最適教材がゆえに帰納的にも学習が進む。これは，冒頭に述べた第1の教授法と第2の教授法を合体した最高教授法である。指導のサンプルは，つぎの通りである。

When you buy a package of	
American cigarettes,	えっと，アメリカのたばこを買うとき，
you'll find a warning	警告に気づくでしょう。
on it saying:	そこに書いてあるんですが，……
"Smoking is hazardous to	
your health."	喫煙は，えっと，健康によくありません。
Only a few years ago,	ほんの数年前は，
smoking was socially	

acceptable.	喫煙は社会的に，えっと，あのー，忘れました。(教師は，もう1度，テープを流す) ああ，喫煙は社会的に容認されていました。
even fashionable,	流行的でさえありました。
but these days	しかし，今日は，
people have become concerned about their health	人々は健康を心配するようになりました。
and are fighting against the habit of smoking.	そして，喫煙の習慣に対して戦っています。

(Taken from Oka and Oka, 1991)

このようなデータが広大コーパスとして蓄積され，分析のまな板に乗るなら，聴解力研究が未曾有の発展を遂げること，必定である。データは，録音テープ数十本とそのtranscriptionと学習者の背景からなる。そのデータの中に多くの真理が埋もれている。そこには，多くの仮説が見えかくれする。それらをひとつひとつ掘り起こしてゆくことは，英語教育学の一大飛躍となる。その共用する広大コーパスから学位論文が数多く提出されたとしても不思議ではない。

ここで，英語教育新時代の幕開けにふさわしいいくつかの基本問題を考えてみよう。聴解を妨げる要因の比重はどうなっているのであろうか。知覚困難，遅延反応，日英語の統語構造の違いなど，いくつかのレベルを包括的に検討することが必要であろう。また，Chomskyのように，言語能力と言語運用に分ける考え方をここで採用するとすると，学習者の中間言語能力は，読むことにかかわる領域の中に中間言語能力を有している。それを運用する場がリスニング活動である。しかし，聴解力が読解力を越える時期が到来するか否か。その時期はいつか。なぜなのか。さらに，読解先習の是非は，どうか。こういった問題は，これまでまったく問われることはなかった。モダリティ間の人間の情報処理のメカニズムに深く根ざす問題がここにある。そのほかにも，やさしい問題から超難問を含むさまざまな現象がここを取り巻く。それらの答は，いずれ得られることになる。そのためには，それぞれの勤務校で以上述べたような録音データを収集し，研究していただきたい。そうすれば，遠くない将来，実際的なリスニングの仕組みや効果の一端がつぎつぎに明らかになるであろう。

参考文献

Bransford, J. D. and Johnson, M. K. (1972). Contextual prerequisites for understanding: Some investigations of comprehension and recall. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, 717-726.

岡　秀夫・岡　Waltraud (1991).『リスニング　タイム』成美堂.

スタインバーグ・ダニー (1995).『心理言語学への招待』(竹中龍範／山田　純・訳) 大修館書店.

山田　純 (1986).『英語教育の根本的誤りを衝く』大修館書店.